

Title	室町物語とその宗教環境の研究
Author(s)	箕浦, 尚美
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/46588
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	箕浦筒美
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第19948号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科国文学専攻
学位論文名	室町物語とその宗教環境の研究
論文審査委員	(主査) 助教授 荒木 浩 (副査) 教授 後藤 昭雄 教授 天野 文雄

論文内容の要旨

本論文は第一篇「室町時代における宗教要素の諸相」、第二篇「室町物語と真宗の談義」、の二篇からなる。「室町物語」(御伽草子や室町時代物語などと呼ばれる)の宗教的環境を文献学的考察を軸として考察した、400字詰め原稿用紙にしておよそ580枚ほどの論文である。

第一篇は、第一章「室町物語における経典享受」に於いて、総論的に、膨大な室町物語群の中に見られる、さまざまなレベルの仏教経典引用について、原典との対比を通じて網羅的に調査し、そのレベル差の測定にも及ぶ。以下は各論で、第二章「『天狗の内裏』考」では、「天狗の内裏」と呼ばれる義経物の室町物語の諸相を、特に十一段本と呼ばれる広本について、古浄瑠璃との関係をも確認しながら、また刊本から派生した異本(実践女子大学山岸文庫本他)について、それぞれ書誌学的考察を行い、また文言の仏教上の出典などについても精細に調査し、二編の資料翻刻も行う。第三章「『勸学院物語』と天台談義所」では『勸学院物語』について、実在の天台宗の談義所が物語の舞台になることにも着目して、その物語の性格と談義の関係を分析する。第四章「『大仏の御縁起』考」では聖武天皇皇后の地獄巡り譚に着目してその『善光寺縁起』との類似などその世界を探り、第五章「『しぐれ』考」においては、代表的な典型プロットを有する中世物語『しのびね物語』との比較を通じて、『しぐれ』の作品世界を再考し、利生譚としての意味をも考察する。

第二篇は、テーマを浄土真宗の談義との関わりに絞り、談義本の形で伝来する「室町物語」が中心的に分析される。就中存覚『女人往生聞書』を一つの大きな柱とする、女人往生説法と室町物語の関わりを、いずれも詳細な諸本研究を提示しつつ考究する。第一章「女人往生の説法と室町物語」では『ゑんがく』、『花情物語』、『胡蝶物語』を対象にやや総論的に論じ、第二章「『有善女物語』考」では『有善女物語』の分析とその典拠の問題を、第三章「『大仏供養物語』考」では東大寺大仏供養での法然の説法が仮構される『大仏供養物語』の成り立ちについて、『拾遺古徳伝』他法然伝などとの典拠関係をそれぞれ探る。第四章「静嘉堂文庫蔵『大仏供養御縁起』の考察と翻刻」では、その『大仏供養物語』一本の精読と資料紹介としての翻刻を提示する。第五章では、室町物語と同内容をもつ真宗談義本の形態と文字の様相、そして伝来の問題などを、珠洲市正福寺の調査結果の提示を併せて書誌学的に分析しつつ、室町物語の位相を談義との関わりで総論的に考察する(「真宗談義本研究の課題」)。なお本論文は問題の所在を概観する「はじめに」が冒頭に、論文総体を総括する「おわりに」が掉尾に付され、論の骨格を明確にしている。

論文審査の結果の要旨

異本を含めて、四〇〇以上の多様な作品が存在する「室町物語」の理解には、内容の分析、作者の問題と併せて、享受の様相の問題に目を向ける必要がある。本の形態や絵の問題など、物としての書物の内実をも精細に捉え、しかるべき文化史のコンテクストに位置づける過程さえ必要な作品群でもある。そうした室町物語と内容を時に共通させるテキストに、岡見正雄氏が「小さな説話本」と呼んだ説教や談義の種本である説草や談義本がある。本論文はその様相を特に真宗の談義を中心に、詳細な諸本研究とともに研究を提示したものであり、室町物語の発生と享受をめぐる研究の一つの重要な視界を有する。本論に集成された申請者の研究には、すでに評価があるが、個別作品の文献学的分析は精度が高く、必要に応じてなされる資料紹介とも相俟って、今後も斯界の研究の礎石たるを失わないであろう。また申請者が論ずる室町物語の宗教的背景—特に仏教の、天台、浄土、そして禅宗他—その要素と内容の分析には、仮名書きで書かれることが多い室町物語の中で、字音で相当に崩れた仮名表記などで記されている、引用経文（時に出典を誤って所伝される）の正確な把握が不可欠である。本論文の第一篇第一章は、如上の問題の分析を、今日、必須となった電子テキストを縦横に使ってなされたものであるが、唐音のくずれた仮名表記まで混じる室町物語の引用については、単純な文字一致では到底室町物語所依の経文にたどり着くことはできない。申請者の作業はそれらを一一つ同定し、個別の作品に還元し、また経文毎に引用のレベル差まで捉えている労作であり、それは本論文全体を貫く方法論ともなっている。

だが、本論文は作品論としての分析にやや弱さがあり、個別の分析を経て提示される結論は、こうした作品群の分析が、文学史的な意味づけとしてどのように位置づけられるべきことなのか、ということにも必ずしも答えていない。談義との本質的関連の考究もまだ十分ではない感もある。また「室町物語」総体の概念規定も必要であろう。宗教的環境を謳いながら、実際には神祇などには触れず、仏教に限定されている点、またその仏教の用語の理解などがやや浅い面を含む点も問題であろう。

だが、それらは、申請者自身が本研究をより展開する過程で室町物語研究総体を展望し、今後の課題として、超克することが期待される。個別の文献学的研究の水準は高く、個々の論文の多くはすでに学会誌等の掲載を経、しかるべき研究として引用されているものもある。また活字化がまだなされていない論文を含めて、本論文は、学界に裨益するところ大であると考えられる。

これらにより、本論文は博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。